

総評 2020.6 月分 杉本真維子

「レントゲン室に入ってゆく母を／一人見送った／暗く冷たい／湖の底みたいな廊下」

的確な比喻。たしかにレントゲン室の前の廊下(長椅子が並んでいるところ)は、湖の底ですね。しんと静かで、たいていが地下にあるからなのか、薄暗いイメージがあります。やまいのひとを見送る心細さと、湖の底のさびしさが重ねられ、孤独が際立ちます。

「母以外が立つお台所は／とつてもうるさい／とつても」

台所ってじつは家のなかで一番騒がしい場所。蛇口からかたまりになって落ちる水。がしやがしやとぶつかる皿。まな板を叩く包丁。深夜の冷蔵庫の「唸り」——。それらのけたたましい騒音を母という存在の安らぎが鎮めていることや、台所仕事に慣れた母の身のこなしの華麗さなどを、愛情とともにしずかに伝えています。

「足指の間がこれは水という」

頭よりも身体(とくにその細部)のほうが、先におのれの状況をつかみとっているものです。そのことをよく表していると思います。

「剥いてある枝豆を買う／きょうだいがいるか／三つ子か 知らぬまま死ぬ」

「知らぬまま死ぬ」のは誰か。それを買った人間とも読めるし、枝豆の豆とも読めます。人間と豆。交わるはずのない二つが、思いかげないところで運命を重ねています。

「遅かった手紙がついて／銀色のポストの底の泥をさらう」も魅力的な作品。「泥をさらう」ほどの何か強い力の到来を感じさせます。

そのほかの佳作は以下のとおり——。では来月もがんばってください。

「アイスクリーム／舐めし凹みのよく光る」「八月の乳母車には誰もいない」「眠るまでが夜で起きたら朝／だから／昼は／ほんとはないかもしれない」「とおくに行きたいと思った／やたら柔らかいバナナをむくとき」「緑のあまりに濃く滾る／白い服を着る」「パーテー／とだけやっと言う老人の皺を／小蠅が渡る真昼間」「生活に詩は宿るから／目薬を／点せばあなたに出来る湖」「レバー式だった手洗い台で／手はとまどいながら／都市に生まれた」「大抵は／扇風機へと淋しさをぶつけて／首を振っていただく」「イデオロギー／イデオロギー／と鳴く夏虫」「雨の降る前に停めた車の下の／乾いた地面だけが過去」「遅かった手紙がついて／銀色のポストの底の泥をさらう」「金粉を撒くような／ガムランの音／濡れた空気を震わせて／彼方の森へ消えてゆく」「しろいらくだのゆめをみる」「ざっさざっさと／落ち葉を踏む子／ざっさざっさと／戦争に行く」